令和7年度　長崎市自然環境調査報告書：鳥類

長崎市自然環境調査委員　吉谷（よしがい）　将史（まさし）

1　令和7年（2025年 1 月 1 日～12 月 31 日）　長崎市自然環境調査報告：鳥類

令和7年 1 年間に長崎市にて記録された野鳥は216種、前年に記録された 220 種よりわずかに下回りました（別添資料　長崎市鳥類チェックリストのとおり）。令和7年に新たに記録された野鳥は、ハリオシギ（5 月・8 月）、ウトウ（4 月）、マダラチュウヒ（5 月）、の 3 種です。



ハリオシギについてはこれまでも野外識別が困難なチュウジシギ同様、春と秋の渡り期に少数が渡来しているものと考えられていましたが確実にそうと言える個体が存在せず同定には至っていませんでした。2025 年 5 月中旬、市内の耕作地に 7 羽ほどのジシギ類が飛来しているのを発見しました。長崎大学環境科学部学生の標識調査の結果、ハリオシギと判明いたしました。また同年 8 月末にも同じ地点にて秋の渡りでの渡来が確認され、今年が初の記録ではありますが従来から考えられていた通り、少数が長崎市内を経由して繁殖地と越冬地を往来していることが立証できました。

ウトウとマダラチュウヒについてはこちらもフライウェイの途上にある長崎市において稀に通過する迷鳥（AV）として記録に加えました。

長崎市の野鳥の内訳としましては、留鳥 RB　45（1 年を通して見られる）、夏鳥 MB　15（繁殖のため初夏に飛来し、秋には退去する）、冬鳥 WV　54（北方で繁殖し、晩秋に飛来、春先に退去する）、旅鳥 PV107（春と秋の渡り期に数日間、羽休めのため滞在する）、不定期にくる冬鳥または旅鳥 IV　59、迷鳥 AV　71（本来のルートとは異なるが、天候不順などのアクシデントにより舞い降りてくる）、移入種として繁殖 IB　1（コブハクチョウ）、不定期に繁殖 CB　2（イカルチドリ、ミゾゴイ）、過去に記録があるが長い間記録がない EX　3（サルハマシギ、オオワシ、オオコノハズク）、計 357種（亜種を除くと347種）です。

ほか検討種 12 種、外来種 6 種をふくめると375種となります。

季節ごとに見られる種数として冬は約 100 種前後、春は約 200 種と倍増、夏は約 50 種、秋は約 150 種と年間を通して多種多様な鳥類を楽しむことができます。

長崎市において特に保護の対象として、レッドデータに記載のある野鳥のなかから代表的なものを一部紹介いたします。

絶滅危惧 IA 類(CR):ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種



和名:アオバズク 体長約 30 ㎝(ハト位の大きさ)

夏鳥として 5 月頃に飛来し、樹洞のある大木に栄巣します。私たちの身近に暮らすフクロウで、人里近くの鎮守の森から学校の校庭の木や市街地の公園を利用することもあります。日中は葉の茂った木にじっと潜んでいます。子育てを終えた 7 月下旬から 8 月(お盆のころ)には越冬地へと旅立ち、姿が見られなくなりますが他所から移動してきたものが 9 月ころまでは時折見られます。渡りでは東南アジアまで 1800km に及ぶ洋上飛行を行なうことが知られています。近年、長崎市内では繁殖個体を見る機会が年々減少傾向にあります。



和名:アカモズ 体長約 20 ㎝(ムクドリより小さい)

稀な旅鳥として 5 月頃に渡りの中継地として渡来します。秋にも少数が飛来しますが春より更に少なく見かける機会はほとんどありません。本州以北の限られた地域で繁殖します。かつては夏に普通に見られるモズでしたが、生息環境である疎林の減少、都市化により大きく数を減らしています。100 年間で生息域が 9 割減少しました。本種は日本でのみ繁殖し世界的に見ても非常に貴重な存在です。種の保存法に基づき「国内希少野生動植物種」に指定され、各地で保護活動や研究が進められています。長崎市においては一時的な滞在のみですが飛来状況を見守っていく必要があります。

和名:チゴモズ 体長約18㎝ (日本産モズで最小)



アカモズ同様 5 月に中継地として利用します。秋にも記録はありますが少ないです。本州中部から東北の主に日本海側の明るい林縁などで局地的に繁殖します。かつては東京近郊の緑のある農耕地などでも見られる普通種でしたがアカモズ同様に急速に個体数を減らしています。近年でも稀に繁殖事例があり、長崎市内でも過去に巣材運びをする様子が観察されたことがあり、確実な繁殖記録はありますが、アカモズ同様稀な旅鳥として扱っています。

絶滅危惧 IB 類(EN):IA 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

和名:ヨシガモ　体長 48 ㎝



冬鳥として全国の湖沼や河川に渡来する淡水性のカモです。環境省の RD リストに指定はありません。長崎市においてかつては市内の池などに少数が飛来し越冬していましたが、2010 年以降、越冬個体は見かけないようになり、移動時期にあたる 11 月に稀に見かける程度になっています。

2023～25 年においては長崎市内では確認できませんでした。美しい緑色光沢の頭部から「ナポレオンハット」の愛称で親しまれるカモですが、近い将来、長崎市では見られなくなる可能性が最も高いカモ類です。

和名:ヨタカ　体長約 29 ㎝(ハトより少し小さい)



夏鳥として全国各地に渡来します。タカの名がつきますが猛禽の類ではなくアマツバメなどに近い鳥です。夜行性で滅多に見る機会はなく、「キョキョキョキョ･･･」と歯車が回るように連続して鳴き響く声が印象的です。長崎市では繁殖の確認はなく、春と秋の渡り期に少数が通過しているようです。かつては 5 月ごろには市街地近くでも夕暮れ時など鳴き声を聞くことが出来ましたが近年はその声を耳にする機会はほとんどなく、幻の鳥になりつつあります。

和名:カンムリウミスズメ　体長約 24 ㎝(ムクドリほどの大きさ)

日本近海及び韓国南部の暖海域のみに生息する小型の海鳥です。国の天然記念物にも指定されている貴重な鳥です。陸に上がるのは子育てをするわずかな期間でその他は洋上で暮らします。雛は孵化後１～２日(まだ飛べない)で岩肌から海に飛び込み洋上で親鳥に守られながら成鳥します。近年、長崎市周辺の無人島でも少数の繁殖が確認されています。



絶滅危惧Ⅱ類（VU）：絶滅の危険が増大している種



和名：ヤマシギ　体長約 34 ㎝（ハトくらい）

水辺に棲息するシギ・チドリの仲間にあって、森林を好む異色の野鳥です。日中は茂みの中に潜みほとんど姿を見せませんが、夜間は耕作地などでも採餌する姿が見られます。非常に警戒心が強いうえ、360 度の視野を持ち真後ろの敵も察知できます。フランス料理では「ジビエの王様」と称され、国内でも狩猟鳥獣（一部地域を除く）として珍重されています。北日本では繁殖しますが、長崎市内では数少ない冬鳥です。

和名：コチドリ　体長約 16 ㎝（スズメくらい）

長崎市内では 3 月中旬ころに飛来し繁殖、8 月頃には退去する夏鳥です。小石のある河原などを好み、ユーモラスに歩き回る姿は古くから日本人に愛され「千鳥足」の語源になっているチドリの仲間です。環境省のレッドデータの指定はありませんが、河川改修や護岸工事によって繁殖に適した砂礫地の減少に伴い、多くの都道府県で絶滅危惧指定がなされています。





和名：ゴイサギ　体長約 58 ㎝（カラスくらい）

国内のみならず世界に広い分布域を持つサギの仲間です。夜行性で古くから「夜ガラス」の名で親しまれています。また和名の由来は、平安時代、醍醐天皇の従者が命により捕えようとした際、逃げることなく天皇の前にひれ伏し、その際宮中への殿上が許される五位を賜ったとされる逸話があります。

かつては市内中心部を流れる銅座川でも繁殖するなど普通の鳥でしたが、近年全国的に数を減らし、2022年からは狩猟鳥獣から除外され、保護への懸念が高まっています。長崎市では留鳥です。

和名：ハヤブサ　体長♂約 40 ㎝　♀約 50 ㎝



　獲物を追いかける急降下時の速度は時速 300km にも達する「世界最速の鳥」としてギネス記録にも認定されています。長崎市内には留鳥として主に沿岸部の岩礁などに栄巣していますが個体数は限られており、見る機会も少ない野鳥です。冬には北方から越冬のため飛来するものもあり、見る機会は幾分高まります。

　新幹線やオートバイ、宇宙探査機にいたるまで様々な乗物（機器）の名に使われ、速さの象徴として親しまれている野鳥です。

・・・



和名:コサギ　体長約 60 ㎝(カラスくらい)

　いわゆる白鷺の名で親しまれるサギの仲間です。足の指の部分が黄色いのが特徴的で、大型のダイサギの嘴が黄色いのに対して、コサギでは通年黒いのも見分けるポイントになります。長崎市内では年間を通して見られる留鳥です。各地の河川にて見ることができますが、全国的に数を減らしており、市内においても栄巣地の減少が確認されています。

和名:チュウサギ　体長約 63～72cm



　ダイサギより小さく、コサギより一回り大きい中型の白鷺です。国内には主に夏鳥として本州以南の水田や湿地に飛来します。温暖な地域では南方へ渡らず冬を越すものも一部いるようで、長崎市内でもほぼ通年の記録がありますが、確実な繁殖記録はなく、旅鳥として扱っています。ゴイサギ、コサギ同様、近年見かける機会が減少している種です。

　特に長崎市では水田や池沼など適した環境が少ないことも一因として挙げられます。



和名:ミサゴ　体長 55～64 ㎝(トビくらい)

　魚鷹の異名の通り、魚類を主食とする猛禽類です。タカ科には属さずミサゴ科としてワシタカ類とは分類上の位置づけも異なります。海岸線の多い長崎市においては比較的目にする機会の多い野鳥で、大波止から浦上川沿いでも狩りをする姿を見ることができます。生態系の頂点に位置するミサゴが生息できる環境があるということは、豊かな海があるということにも繋がり、逆にミサゴが個体数を減らすということは海洋資源に何らかの影響を及ぼしているということになります。 通年見られる留鳥で同じ巣を環境の変化がない限り、何世代にも渡り利用します。ツルの港にたとえられる美しい港町、「長崎」を象徴する野鳥と言えます。



和名：ノジコ　体長約 14 ㎝（スズメくらい）

日本国内（本州中部以北）でのみ繁殖する世界的に見ても希少な小鳥です。冬は中国南部、台湾、フィリピンで過ごします。長崎市においては春と秋の渡り期に毎年一定数が通過することがこれまでの調査で明らかになっています。春は日本本土の玄関口として、秋は越冬地に向かうため洋上へと旅立つ前の重要な中継地であることが考えられますが、ノジコの渡りルートについては未だに解明されていないのが現状です。

情報不足（DD）：分布やデータが蓄積されておらず絶滅のリスクを正しく評価できない種

和名：イカルチドリ　体長約 20cm

コチドリより一回り大きく、目の周りの黄色いアイリングが目立たず嘴も長いことから区別できます。また留鳥または漂鳥として年中生息する点もコチドリとは異なります。長崎市においては近隣地区に棲息する一部の個体が新たな縄張りを求めて時折、訪れる稀な漂鳥と考えられていましたが、近年、栄巣から孵化まで確認できた事例があり、今後定着するものかどうか見極めていく必要があります。



以上、長崎市レッドリストの一部を紹介いたしましたが、希少生物保護の観点から、撮影地ならびに時期については明記しておりません。